

「平和な世界」と「世界の平和」

村田 晃 嗣 (総合科学部地域文化コース 教官)

もう30年近く昔のことである。東京大学法学部の坂本義和教授(当時)が、大国間の力の均衡を維持して世界の安定を保とうとする考え方(バランス・オブ・パワー論)を「国際政治の神話」と呼んだことがある。これに対して、京都大学法学部の猪木政道教授(当時)は、バランス・オブ・パワーだけが全てではないにしても、これを無視するのは「神話の国際政治学」だと反論した。

今の学生諸君にはどうでもいい論争かもしれない。しかし、「神話の国際政治学」は今も続いているように、私には思われる。曰く、「反戦平和」「核廃絶」「日米安保廃棄」「ヒロシマの心」——こうしたスローガンはキャンパスにも街中にも溢れている。信念を持つての発言なら、それは結構なことである。しかし、どうやってそれを実現するのか。こここのところの議論は、寡聞にしてあまり聞かない。職業的政治活動家なら、スローガンを1日に100回も200回も連呼するだけで仕事になるだろうが、学問の府で学ぶ者なら、そこから一歩進んで「ではどうやって」を問わねばなるまい。政治学や国際政治学はそこから出発するといっても過言ではない。

今の世の中、いくら政府を批判しても、「反戦平和」「核廃絶」を唱えても、それでお縄になる心配はない。「ではどうやって」を考えないかぎり、それはお気楽なことである。しかも、ちょっぴりカッコいい。怖いのは、反権力や道徳的ポーズ、スローガンを無批判に繰り返すうちに、ついに「ではどうやって」を考えない体質に染まってしまうことである。

こんな事を書くこと“反動分子”ということになって、“意識の進んだ”人たちから抗議

を受けるだろうか。丸山真男という政治学者がいた。「大日本帝国の実在よりも戦後民主主義の虚妄に賭ける」と喝破した戦後リベラル派の代表的論客である。ある時、彼の研究室が学生運動で散々に荒らされてしまった。丸山は「こんなことは戦前の軍部ですらやらなかった」と嘆いたという。おそらく、彼の研究室を荒らした人々も、常日頃「平和」「民主主義」「人権」について熱心に語っていたであろう。丸山と彼らの違いは、自らの理想実現のために真摯に思索したか否かという点にある。

冒頭の「国際政治学の神話」と「神話の国際政治学」という論争に引っかけて言うなら、自らが語る「世界の平和」を定義すらせず、その実現方法について考えもしない「平和な世界」に安住しているかぎり、「世界の平和」など決してやって来ないということである。



虫愛づる教官

宇佐美 広介 (総合科学部数理情報科学コース 教官)



子供の頃から虫が好きだった。東広島キャンパスでは虫達によく出会う。実は散歩ついでにこちらから会いに行く事もあるのだけど。

初めてアオマツムシと会ったのは去年の秋頃の夕暮れ時だったと思う。外出から8階の自分の研究室に戻って窓際の机の上を見ると2cm程の長さの虫がいた。図鑑や写真ではよく見ているアオマツムシ(♂)だとすぐに分かった。窓を少し開けておいたからそこから入り込んできたのであろう。それにしても、どうやって8階までできたのだろうか？

アオマツムシというのはいわゆる帰化昆虫の一種で、都市部の街路樹などに生息している。「リユールリユール」とか「リーリー」という鳴き声を出す。学内やブルヴァール沿いにも沢山住んでいる。知らない人にも、夏や秋の夜に彼らの大合唱の中でこの鳴き声を出している虫だと言えば直ぐに認識してもらえるであろう；ただしなかなか姿は見えないのである。あのような大合唱をするのに樹上にいるため姿の見えないアオマツムシに筆者はいくらかの憧れを抱いていた。

机上の彼は動き出す様子もないので手元にあった空ビンにそっと捕獲した。名前の如くマツムシの一種なのだけど鮮やかな緑色をしていて体型もマツムシよりスマートな感じがする。ビンの壁に平気で逆さになって留まったりもしている。普通のマツムシとかコオロギの仲間はこんなことはできないと思う。地上生活者と樹上生活者の違いであろう。ひょっとして鳴き出したりしないかなと思ったがそうはならなかった。多分、虫の居どころが悪かったのだろう。

虫が好きだといっても筆者は希少種を標本にして悦に入るというマニアではないので、

しばらく観察した後で放すことにした。学内の木にでも放してやろうと思ったのだがどうしたらよいのか分らなかった。とりあえず屋外に出て彼をビンから出して掌に乗っていた。すると彼は少し歩き回った後、驚いたことにいきなり羽を広げて蜂か蟬のように夜空に飛び去っていった。

コオロギの仲間には一般には飛翔することはないと思う。しかしアオマツムシは空を飛び回るようである。こんなことは図鑑には書いてなかった！樹上生活者なのだが、筆者は大発見をしたと、ひとり悦に入っていた。道理で8階まで訪ねてきた訳だ。

最近、自宅にスズメバチが2度も入り込んできた。ビルの7階である。初めは少し大きめの蜂が入り込んできたなあと思っていたが近寄ってスズメバチだと確認した瞬間にはドキッとした。体が硬直した…。彼女に気付かれなように遠巻きにしながらヴェランダの戸を大きく開けてやったらやっとなって行ってくれた。本をひもとくと、初春の頃、彼女らの中には引越しをする一家もあるとのこと(人間と同じ?)。ひょっとして近所にお引越しされてこられたのでしょうか？

いくら虫が好きだといってもこういう訪問者はお断りしたい。



フィリピン旅行記

2月23日夜、マニラの空港から一歩出た途端、熱帯独特の“ムウォン”という空気に包まれ、私はフィリピンに来たのだと実感しました。

ゼミ旅行ということで広大生4人、関西大学の学生4人、教授各1名ずつ合計10人でフィリピン各地を周りました。主な訪問先は、マニラ近郊のケソンと、フィリピンの避暑地として米国統治時代にアメリカ人によって開発されたバギオです。バギオへ向かう際に通った「ベンゲット道路」の建設には日系移民が労働力として多数投入されており、バスに揺られながら当時の日系移民の苦難や功労を思い、感慨に浸りました。実際、バギオ市の各所には日系人の足跡が残されており、彼らの子孫は今も健在です。

この旅行を通して、フィリピンの文化や歴史、それに関わる日系移民の歴史、またフィリピンで働く青年海外協力隊の活動やフィリピンの学生の様子など様々なことに触れることができました。また、今回の旅行をずっと一緒について世話していただいたBebeさんとその家族の人には本当に感謝の念にたえません。彼女たちはいつも陽気で温かく、おかげで私たちは無事に、そしてとても楽しいフィリピンでの9日間を過ごすことができたのでした。

(総合科学部3年 社会科学コース
戸川 純子)



フィリピンでは、すばらしい出会いがたくさんあったのですが、中でも印象に残ったのは、青年海外協力隊の温谷さん・鶴田さんと、一緒に旅を共にした関西大学の学生のみなです。

温谷さんは、ベンゲット州立大学で水産を専門に教えておられるのですが、エルニーニョ現象と乾期のおかげでテラピアを育てている池が干上がってしまったりと、かなり苦闘しておられました。また、日本語学校で日本に留学したい学生さん達に、一生懸命日本語を教えておられる姿には、心を打たれました。

鶴田さんは、同じ大学の養蚕場で蚕の飼育を専門に指導しておられます。(ノ)



鶴田さん、温谷さんともものすごくいい人で、おおらかで、人としてもものすごく尊敬してしまいました。

昼間はそうやって職場を案内していただいたり、夜には学生達をライブハウスに案内してもらっている話を聞かせてもらったりと、すごく貴重な体験をさせていただきました。

関西大学の学生の人たちも、気さくな人たちがばかりで、すぐにうちとけて、一緒に旅をして本当に楽しかったです。

今回の旅で得るものは多かったです、すばらしい出会いに本当に感謝しています。
(総合科学部3年 社会科学コース
武木田 千恵美)



アジア経済研究所で長年勤務された浜渦先生は、今回訪れたフィリピンを含むアジア諸国を研究フィールドにされています。今回の旅行に同行した私達は、上に挙げたことのほかに、職業訓練学校の視察、長距離バス旅行、「国とは何か」というテーマでの学生ディスカッション(もちろん英語)、フィリピン大学の先生のお宅でいただいたおいしい食事etc... 浜渦先生の知り合いである向こうの研究者の方達によるプランと準備、そしてhospitalityのおかげで、このような普通の旅行では得られないかずかずの体験をしました。

広大勢が帰国した後、自分一人だけ5日間延長して、歴代大統領の居館であるマラカニヤン宮殿や、“Q-Mart”という雑貨市場を見学したり、フィリピン大学で(卒論で扱うつもり)資料をコピーしたりしました。その他に特筆すべき事柄は、スービック元米海軍基地に連れて行ってもらい、現地で独自の経済開発を担っているSBMA(Subic-Bay Metropolitan Authority)の職員の人にインタビューする機会を持てた事です。その上、車で現地の輸出加工区の様子を案内してもらい、港湾や飛行場、進出メーカーの工場や観光施設などを見て回りました。日本や台湾、欧米の進出企業が目立ち、フィリピン経済成長の原動力の一翼を担っている様子が実感されました。

今回の旅行でいろいろとお話をさせていただいたParen教授、娘のBabeさん、アジ研の藤崎先生にはとても感謝しています。

(総合科学部4年 社会科学コース
入交 洋彦)

お初にお目にかかります — 新任教員紹介 —

尾関 (原口) 友佳子 (生体行動科学コース 助手)



広島大学は、3つめの所属大学になります。小学校時代(山梨県)以外は高校まで熊本県で教育を受けました。福岡大学の文化学科(比較文化コース)を卒業後、久留米大学大学院比較文化研究科で修士および博士課程を修めました。私の専門は心理学で、健康意識の変容に及ぼすストレスコーピング過程の影響を調べています。生体行動科学コースの助手として、臨床パーソナリティ研究室に机を置かせてもらっています。

ところで久留米大学には、ここ広島大学総合科学部と同じく課程博士(学術)認定の制度があります。目下、博士論文の準備をしていますが楽しい学会や慣れない日々の仕事などに埋もれています。まだまだ大学構内や西条の町などで知った顔に会うのも気軽に嬉しい毎日です。福岡に家族がひとりおりますので、たまに帰省します。

浅野 晃 (数理情報科学コース 助教授)



★経歴……1964年大阪生まれ大阪育ち、大阪大学大学院工学研究科応用物理学専攻博士課程修了後、九州工業大学情報工学部機械システム工学科助手を経て現在に至っています。数理科学の教官としては少し変わった経歴です。

★研究……例えば「画像にどのような演算を施すとどのように画像が変形するのか」「複雑な画像を一言で表現するうまい方法はないか」などの、「画像情報科学」を研究しています。

★趣味……コントラバスを弾きます。水泳とスキーも好きです。

◎私の「ホームページ」<http://www.mis.hiroshima-u.ac.jp/~asano/>へ是非お越しください。研究・趣味などいろいろなお話を掲載しております。

フランク・カロリン・E.H. (地域文化コース 講師)



旧西ドイツのフライブルグ市に生まれました。その大学で地理学、歴史とドイツ文学を勉強しました。北アイルランドに半年留学して、そこで人文地理の研究もしましたので、修士論文も北アイルランドについて書きました。修士をとった後フライブルグ市と松山市の姉妹都市関係で日本に行くきっかけがありましたので、一年間松山で日本語の勉強をし、そして続けて松山大学のドイツ語講師を勤めました。その後、ドイツと日本の間を行ったり来たりしながら、そして日本にいる間は様々な大学のドイツ語講師を務めながら地理学の研究をつづけてきました。テーマは日本とヨーロッパにおける地域開発、そして観光と地域のつながりですが、そのテーマでフライブルグ大学で博士をとりました。愛媛、神戸、京都、そして広島と、日本を転々と回ってきました。これからは広島大学で地域の変化と発展に対する研究を続けたいと思います。

小野寺 真一 (自然環境研究コース 講師)



研究テーマは、亜高山山地や乾燥地域などの物質循環や地形変化の活性の高い地域における、土砂・水質問題の解明についてです。性格は、東京生まれでせっかちなところがあります。ただし、大学院時代に時計の速さが1/10の国(タンザニア)で精神修行を積み、今に役立っています。はじめハクナマタ(問題ない)とボレボレ(ゆっくり)という現地仲間の口癖が嫌いでしたが、最後にはその良さが分かるようになりました。昨年、山地の地形調査がこうじて沢登を始めました。今年は、初めて3000m級の登山をしようと考えています。

的場 いづみ (人間文化コース 講師)



人間文化コースに着任した的場いづみです。専門は20世紀アメリカ小説で、特にウラジミール・ナボコフが好きです。担当科目は英語と現代欧米文学研究、現代小説論演習。現代欧米文学研究では受講学生の勉強している分野がバラエティに富んでいて、様々な反応が返ってくるのが楽しいです。前任校は長崎の活水女子短期大学ですが、育ったのは主に東京近辺と神戸近辺です。趣味は映画を観たり、美術館巡りをすること。広島にきてからコンテナ・ガーデニングに挑戦しています。

青木 利夫 (人間文化コース 講師)



大学在学中、メキシコを中心に南米数カ国を1年間にわたって放浪。それがきっかけでラテンアメリカ研究を志す。大学院在学中は、19世紀後半から20世紀前半におけるメキシコの思想、文化、教育の問題に関する研究を行った。現在も、メキシコのナショナリズムと文教政策に関する研究を継続しているが、ラテンアメリカを題材にしながら、「混血」、「クレオール」、あるいは「他者認識」や「異文化理解」などといった問題にも関心を広げている。スペイン語と現代社会文化を担当。

浮穴 和義 (生体行動科学コース 助手)



4月1日付けで、広島大学総合科学部生体行動科学コースの助手として着任いたしましたウケナと申します。生まれは四国愛媛の今治というところで、もうすぐ尾道から貫通する西瀬戸大橋の最終地点です。大学院修士課程まで広島大学理学部に在籍しており、博士課程から生物圏科学研究所に移り、現在に至っています。私は、絶えず「動物の脳は、どのような情報伝達物質を合成・分泌し、どのような行動を制御しているのか」というテーマに興味を持ち、研究材料にネズミ・トリ・カエル・ミミズ等を用い研究をしてきました。今後も、脳が持つ物質に着目して脳の機能を解明しようと考えております。今後とも、何卒宜しくお願い致します。

入野 宏 (生体行動科学コース 助手)



今年3月に大阪大学人間科学部大学院の博士課程を修了し、4月から総合科学部の助手として採用されました。専攻は、認知生理心理学です。目には見えないところの動きを脳活動から推測しようとする研究分野で、私自身は、刺激の分類判断や記憶といった精神活動を、脳波の一種である事象関連電位によって検討しています。「クールな生理学的指標で、ホットな人間のこころに接近していく」ところに、この研究の面白さがあります。趣味は、音楽鑑賞(ジャズとクラシック)、散策、ドライブなど。

東谷 誠二 (物質生命科学コース 助手)



本年4月1日付けで基礎科学研究講座の助手に着任しました東谷です。ヒガシタニと読みます。専門は超流動ヘリウムや種々の超伝導物質を対象にした量子凝縮系の物理で、現在は超伝導体の表面物性を主な研究テーマとしています。C棟の212号室で窓越しにゴミ捨て場の煙突が眺めながらとても静かな環境の中で研究に動んでいます。緑豊かな西条キャンパスの雰囲気はとても落ち着いた気分させてくれます。あとは缶コーヒーとタバコ少々ですぐエンジンがかかります。ところが、勝手に雑音が恋しくなったりすることがあります。皆さんはそんなことはないでしょうか。そのせいかどうか、大学を離れるとビリヤード場に行きたくなります。学生の頃はパチンコ屋がお気に入りの空間でした。どうも無意味な雑音が脳によい刺激を与えるようです。下見の焼き肉屋の2階にカラオケ屋といっしょになったビリヤード場がありますよね。そこによく行くので見かけたら声を掛けて下さい。学生の皆さんとも交流の機会を多くもち、楽しくそして充実した研究生生活を送っていければと思います。

山中 勤 (自然環境研究コース 助手)



4月1日付けで着任いたしました。学部2年の時に原爆資料館を訪れる機会があって、いつか子供ができたらし是非連れてこよう、と思ったものですが、あれから8年経ち3児の父親として広島に来ようとは思いませんでした。関東平野以外で生活するのは、これが初めてで、どちらを見ても山、という環境がとても新鮮に感じられます。ただ、毎年5回は行っていた東京ディズニーランドから遠くなったのが残念で、妻と娘をなだめるのが大変です。専門は水文学(すいもんがく)。大気・陸面間での水の循環とそれに伴う熱と物質の動きに関心を持っています。森羅万象の理解に向けて、一歩ずつ着実に歩んでいきたいと思っています。

ウルシュラ・スティチェック (人間文化コース 助手)



私はウルシュラ・スティチェックですが、友人たちによってウラと呼ばれています。ポーランドの首都、ワルシャワに生まれ育ち、ワルシャワ大学東洋学部日文学科を卒業し、修士論文の題名を「原爆文学の研究」にしました。そして、4年間ワルシャワ日本人学校で働いて、1990年8月に日本を旅行した時、広島原爆投下犠牲者の45周年記念日に参加しました。その日から私の人生が転換しました。できることならば、「原爆文学」の研究を広島で続けたいと決心しました。それで、日本に留学して、最初は広島大学総合科学部の研究生として、そして修士課程の論文を「原爆文学の不安文学」にして「原爆作家」と言われる原爆文学の研究をしました。今年4月から、助手の仕事しながら、博士論文を書いています。これは「実存的不安の研究—日本とポーランド戦後文学」という比較文学研究論です。主にヒロシマとアウシュヴィッツについての文学作品を取り上げます。

全世界の人々の人権を犯さないように協力するアムネスティ・インターナショナルなどの平和的社会的運動の活動に関心を持っています。また、私は自然が好きで、登山や乗馬に興味を持ち、「まだ発見されていない場所」を旅するのも好きです。

卒業論文題目紹介



学生氏名 指導教官

特別研究論文題目

人間文化コース

荒谷 定生 稲田 勝彦
 坂垣 敏郎 武田 紀子
 上田 浄介 西村 雅樹
 岡本 直子 青木 孝夫
 岡本 直美 稲田 勝彦
 小野ゆかり 佐藤 正樹
 岸川亜紀子 金田 晋
 小松 重美 加藤 徹
 塩田 祥子 金田 晋
 田中己珠恵 SHAPIRO, JEROME-FRANKLIN
 田畑かおり 原 正幸
 西岡 浩一 品川 哲彦
 塩平小夜子 西村 雅樹
 橋森 茂雄 西村 雅樹
 藤原 友晴 吉田 純子
 前田 逸人 古東 哲明
 横 優子 島谷 謙
 松井 清正 齋藤 忠資
 宮崎 由絵 島谷 謙
 村中 慎吾 島谷 謙
 宮崎 昭好 金田 晋
 百田 武史 西村 雅樹

現代男女関係におけるコミュニケーションについての考察
 歌舞伎研究「市川猿之助の世界」
 映画における「東京」崩壊の表現
 文化としてのサクラ研究
 トランパーの失敗と回復について ジョン・アーヴィング「ウォーターメソッドマン」解釈
 幕末明治の女たち 一篠田勉造の聞書の世界一
 マグリット研究 一画家マグリットと広告デザイナー マグリット一
 藤子・F・不二雄論
 空間と絵画 ジャポニスムにおける装飾美術
 SHAPIRO, JEROME-FRANKLIN 映画における火のイメージ
 パンフルートのルーツ
 遺伝子診断は何をもたらすか
 シンガポールの食文化にみる多民族の共生
 スパイと健康
 マンガと子どもたち ～子ども向けマンガ文化の功罪～
 「春と修羅」論 ～境界線上のドラマ～
 世紀転換期を生きた女性たち (ルー・ザロメとレーヴェントロー研究)
 トランスパーソナルの視点 スタニスラフ・グロフの場合
 マリリン・モンロー “永遠のスター”の虚像と実像
 映画監督北野武が描く「死」
 広島路面電車の研究
 フロイトと芸術解釈

地域文化コース

朝井 千尋 崔 吉城
 石田 隆 浅野 敏久
 上田 大輔 橋瀬 正明
 加藤 博美 安西 信一
 佐野 隆幸 浅野 敏久
 嶋岡 正 朝倉 尚
 庄司 大輔 布川 弘
 中島 満香 安西 信一
 中山 尚之 柳澤 浩哉
 仁科 明夫 佐野真理子
 本田 和雄 佐野真理子
 村田 敏夫 崔 吉城
 森清 友祐 崔 吉城
 山本 洋 佐竹 昭
 山本ひろみ 崔 吉城
 和田 貴裕 柳澤 浩哉
 志岐 公一 水羽 信男
 瀬尾 亮 浅野 敏久
 山之内宏美 橋瀬 正明
 井上 泰之 水羽 信男

日本におけるセクシュアル・ハラスメントの問題点と対策
 住民の属性の違いからくるメンタルマップのずれ 一東広島を例にとって一
 近年の中国労働事情研究 一国有企業労働者を中心にして一
 プルジョワの道徳的価値観とオープンスペース運動 一19世紀イギリスにおける土地
 認識とレクリエーション観の変容一
 日本における「まちづくり」の概念と特徴
 「日本霊異記」の世界
 日本におけるサッカーの普及とその特徴
 室町期における庭者・山水河原者とその実像 一作庭分野における専門化について一
 競走馬像の変遷 一特定性から似意性へ一
 名物の創造と観光 ～さぬきうどんを事例に～
 大学における体育会活動に関する人類学的考察
 戦後日本社会の変化と麻薬のボーダーライン
 在日韓国・朝鮮人にとっての民族教育 一民族性保持の観点からの考察一
 軍師竹中半兵衛像の形成
 現代社会における葬儀の産業化
 日米の広告比較
 朴正熙政権下における教育改革について 一「近代化」政策と関連して一
 地方都市における前衛音楽
 近代日本の中国に対するアヘン政策
 改革開放政策開始時における鄧小平の政治思想 一民主主義との関連から一

社会科学コース

天野 哲朗 伊藤 護也
 井伊かおり 李 東碩
 岩本 信治 李 東碩
 宇壁 賢二 李 東碩
 岡部えみ 奥村 和久
 河野 美鈴 岩田 賢司

夫婦別姓制度 一なぜこの制度の導入が必要か一
 日本のメインバンクシステム
 情報通信産業の世界統合化とアメリカの相対的貧困の深化
 中国の体制転換 一自動車産業の分析を通して一
 韓国における政府主導型経済システムの軌跡 ～その成功と挫折～
 ポスニア紛争と国連 一国連の限界と可能性一

久保田建央
 佐藤恵美子
 白川 淳子
 砂田 葉子
 田中めぐみ
 地京 美紀
 小池 聖一
 寺田 佳織
 中道 聡
 西嶺 昌志
 長谷川誠之
 日高 雅寛

森 利一
 伊藤 護也
 石倉 康次
 奥村 和久
 甲斐 祥郎
 聖一
 石倉 康次
 田村 和之
 秋葉 節夫
 岩田 賢司
 秋葉 節夫

対米開戦通告遅延問題
 現行家族法における団体と個人 ～家族法改正問題を中心として～
 高齢期、誰と住むか 一高齢者の「コレクティブ・ハウジング」の試みと展望一
 韓国自動車産業の再編に向けて 一起車自動車を事例として一
 外国人労働者をめぐる日本の出入国管理政策
 「文教族」に関する一考察 ～自民党文教政策への一視角～
 男女共生時代における男性の育児参加
 マスコミ報道による被害に対する救済の可能性
 都市再生をめぐるまちづくり ～倉敷市水島地区を手がかりとして～
 カシ海資源をめぐる国際政治
 地域住民に根ざした地域振興のあり方に関する一考察 ～広島県豊田郡瀬戸町を事例として～
 女性労働問題の変遷
 資源リサイクルの経済的手法に関する比較研究
 ベトナム自動車産業の行方
 現代農村の都市化と混住化社会 一東広島市西条町下見地区を事例として一
 男女雇用機会均等法の展開と課題
 笑いの効用 ～笑いの多様化の視点より～
 少年司法と通正手続 ～「調布駅南口事件」が提起した問題点～
 わが国における障害者の移動・交通権の保障 ～A・D・Aとの比較を通じて～
 NOOR AIZAH ABAS 浜渦 哲雄 マレーシアの自動車産業における日本の管理方式の導入 一PROTON
 社の事例について一
 村田 雅洋 石倉 康次 登校拒否の子供たちの「居場所・学びの場」に関する研究

藤田 稔哉
 前田 数成
 柳井 友裕
 山瀬 隆弘
 山村麻由美
 横山 智
 米田和歌奈
 米富 久枝
 NOOR AIZAH ABAS

甲斐 祥郎
 松岡 俊二
 浜渦 哲雄
 秋葉 節夫
 甲斐 祥郎
 材木 和雄
 田村 和之
 石倉 康次

外国語コース

石原 聖子
 大村健一郎
 岡野 瑞枝
 神原 美穂
 北内 佳苗
 古藤 隆志
 島崎 尚子

伊藤 昭子
 SKAER PETER MACKALL
 谷本 秀康
 小川 泰生
 小川 泰生
 安仁屋宗正
 KOJIMA-RUH, CHRISTEL HANNELORE

On Forming Identities of Female Characters in Beloved Focusing on Denver
 Returnees in Japan: A Report on the Advantages and the Disadvantages of Japanese Repatriated Children
 A Study of Machine Translation of Basic Verbs
 中国における真の女性解放について
 日本と中国における茶文化の歴史と比較
 A SYNTACTIC ANALYSIS OF ELLIPSIS IN ENGLISH PROVERBS
 遠い異国へのあこがれ "Mokusei! Eine Liebesgeschichte" に現れた日本のイメージ

堤 五十美
 中島美陽子

谷本 秀康
 SHREINER, CHRISTOPHER-STEPHEN

The Comparison of Color Expressions in Japanese and English
 CATCH PHRASES IN ADVERTISING: Tracing Culture Changes in America and Japan

中茂亜希子
 長縄 惠美
 橋口 洋子
 蓮尾 美幸
 原田絵里子
 原森 義則
 平井 裕子
 藤谷 丈雄
 松尾奈緒子
 宮岡 絵里
 宮近かおり

小林ひろ江
 澤田 肇
 HIGGINS, JANET-MARY DOREEN
 小川 泰生
 岩倉 國浩
 山田 純
 鎌田 勇
 西田 正
 鎌田 勇
 澤田 肇
 鎌田 勇

A Study of Japanese University Students' Use of Requestive Hints
 19世紀バリの変遷 一公衆衛生と街づくり一
 A STUDY OF JAPANESE APOLOGY STRATEGIES
 映画を通して見る九七問題と香港人の心情
 A Syntactic Study of Clausal Complements of Prepositions in English
 Reading Processing in Japanese Students
 English Phrases in Japanese Popular Songs
 The Effect of Vocabulary in Listening Comprehension
 Comparison between Japanese Onomatopoeia and Corresponding English Expressions
 フランスにおける知識人と政治参加
 DECLINING INVITATIONS AND REQUESTS: COMPARISON BETWEEN AMERICAN AND JAPANESE UNIVERSITY STUDENTS
 The English vocabulary size of Japanese university students and their psycholinguistic features

三輪絵美子

山田 純

SHREINER, CHRISTOPHER-STEPHEN Cultural Success and Personal Struggle in America: The Case of Billie Holiday, a Jazz Singer

森田 陽子
 森本 英治
 森本 恭子
 山根奈緒子
 大田 真弓
 宮崎 妙美
 村岡 達之
 渡利友三依
 山田 織江

小川 泰生
 西田 正
 吉田 光演
 山崎 直樹
 井口 容子
 井口 容子
 岩倉 國浩
 澤田 肇
 小川 泰生

現代中国語文法研究 ～方向を表す前置詞'往' '朝' '向'の差異について～
 A Review of the Critical Period Hypothesis in Second Language Acquisition
 現代ドイツ語における短縮傾向分析 一基語から選択されやすい短縮形一
 中国語の中の外来語研究
 フランス語の無題文について
 カナダのフランス語について
 A CONTRASTIVE STUDY OF SYNTACTIC DIFFERENCES BETWEEN BRITISH AND AMERICAN ENGLISH
 La Formation des élites à l'École Polytechnique
 日中語の受動表現に関する研究 一「(ラ)レル」と「被」が対応しない場合について一

数理情報科学コース

安部 直哉 奈良 重俊
飯川 知明 阿賀岡芳夫
石山 智昭 中原 早生
今井 康裕 桑田 正秀
江井 秀和 原田 耕一
碓井 正人 柴田徹太郎
大坪 章男 西井 龍映
川下 義昭 柴田徹太郎
黒木 洋充 西井 龍映
佐々木倫隆 水田 義弘
下地 淳 奈良 重俊
中島 亮 山縣 敬一
水野裕一郎 桑田 正秀
吉中 圭二 原田 耕一
野崎 洋恵 西井 龍映
平河 順洋 吉田 清
上本 浩史 阿賀岡芳夫

セルオートマン及び生体信号の複雑さから見た関連性
双曲幾何におけるポアンカレ・モデルの構成
暗号通信プロトコル SSL について
品質設計のための実験計画法
曲率の連続性を考慮した補間手法の開発
関数解析と微分方程式の研究
画像のフィルタリング手法の比較
微分方程式の歴史及び解法
空間分解能の改良に用いる画像の選択
数列の幾何
多次元力学系の形と構造
B & zier 曲面の GUI による形状操作
経時測定データの解析
コンピュータ・アニメーションのためのデジタル・グラフィックス変換
エッジ抽出と画像間距離
社会現象の数理
Riemann 幾何としての双曲幾何



物質生命科学コース

青木 正和 藤井 博信
木村 亨 上領 達之
合田 義孝 河原 明
杉原理恵子 赤堀 興造
田中 翼 清水 典明
田中南海子 小南 忠郎
田村 貞明 深宮 齊彦
中村 慎吾 小島 健一
名取 孝浩 星野 公三
松本 勝之 宇田川眞行
丸橋 志功 宗岡洋二郎
三村 綾 岡野 正義
村上 弘幸 安藤 正昭
高橋 大祐 内山 敬康

新規 Mg-Al-Ni 合金の水素化特性と元素置換効果
パン酵母の全ゲノム配列を利用した SCP2 ホモログ遺伝子の検索とその発現
甲状腺ホルモンの不活性化遺伝子とホルモン受容体遺伝子の両生類変遷過程における役割について
光合成光化学系IIチトクロムb-559について
DM染色体を選択的に取り込むヒト間期核出芽の形成機構
一酸化窒素合成酵素の精製と反応機構
台湾産シンジユの成分検索
パラジウム中の1Hの核磁気共鳴
分子動力学シミュレーションの可視化
マグネタイトのラマン散乱による研究
脊椎動物の生理活性ペプチドの比較的安全性
中国産ニガキ科植物中のクアシノイド化合物
海水ウナギの飲水中枢の検索
DM染色体の細胞外排出に関与する微小核の形成機構



自然環境コース

青木 誠治 早瀬 光司
秋丸 真一 開発 一郎
安藤 直樹 根平 邦人
市野進一郎 富樫 一巳
大隈 恒 根平 邦人
大村 昌良 開発 一郎
小椋 聡子 堀越 孝雄
笠井 佳子 堀越 孝雄
倉本 大樹 中根 周歩
児玉 秀樹 海堀 正博
近藤 俊明 中越 信和
白築 治枝 福岡 義隆
鈴木 雅代 中根 周歩
高垣 英二 本田 計一
高橋 麻衣 櫻井 直樹
竹土井 寛 藤原祺多夫
塚本 英士 吉川 友章
外山 伸 日下部眞一
中川 彩美 本田 計一
橋口 隆 設楽 惣助
林 隆也 於保 幸正

公共空間における散乱ごみの発生を効果的に抑制する
方法を探る研究
アカマツの土壌-樹木-大気連統系の水分移動に関する
観測
落葉性ブナ科実生による林相転換
屋久島の野生ニホンザルのオスの順位と繁殖戦略
国立公園三瓶山における草原植物の種多様性に関する生態学的研究
草地土壌地表面薄層における水分・物理特性値の空間分布
エルゴステロールを指標とした種々の草本植物の根中の菌根菌の定量
富士山の標高の異なる針葉樹林における土壌微生物の分解活性
赤外放射温度計を用いたマツの樹木温度の測定
キャンパス渓流における土砂の生産と移動の実態について
広島大学キャンパス渓流域のビオトープ創出事業の生態学的評価
二次林構成樹木の比較生態学的考察
大気汚染物質曝露によるマツの光合成光化学系IIへの影響について
クラスザンショウ中のクアゲハに対する産卵刺激物質に関する研究
高等植物のグルカン合成酵素に関する研究
レーザーホトリシスによる天然水溶存有機物の水和電子発生過程の検討とキャラクタ
リゼーション
メソスケールの気流、拡散の数値計算モデルによる杉花粉分布の計算
ムラサキツユクサ突然変異系統 KU9 を用いた遺伝子環境汚染モニタリング
蝶類成虫の採餌行動発現因子に関する研究
カキ殻を利用した生活排水の高度処理
三段映の節理と地形

原田 大生 早瀬 光司
藤重 邦隆 設楽 惣助
森 拓哉 佐藤 高晴
森口 俊宏 中越 信和
安田 留美 福岡 義隆
山下 俊幸 佐久川 弘
渡邊 哲也 海堀 正博
古味山典 福岡 正人
安原 俊輔 佐久川 弘

企業内における紙類を中心とした環境パフォーマンス評価に関する研究
黒瀬川流域河川の水質、特に窒素成分の変動について
霧山溶岩の古地磁気
都市景観域におけるオープンスペースと都市計画用途地域
悪気様出現条件に関する気象学的研究
広島大学内のごみ焼却施設から排出されるダイオキシン類の測定
土石流化した前壊土砂の運動と物理的特性についての研究
経済学における自然観、特にエントロピー概念の導入及び展開に関する考察
大気中及びごみ焼却施設から出される排ガス中の硫化カルボニルの測定

生体行動科学コース

荒田いづみ 河原 明
岩見 有紀 黒川 正流
江畑 昭之 堀 忠雄
緒方 真紀 浦 光博
黒瀬 邦治 黒川 正流
高口 央 坂田 桐子
西郷恵津子 筒井 和義
佐々木玉恵 岩永 誠
貞正 綾美 小南 忠郎
西村 太志 浦 光博
野村 祐子 関矢 寛史
福地健太郎 調枝 孝治
藤原 裕弥 生和 秀敏
的場 弘明 渡邊 一雄
前田賢一郎 浦 光博
坂田 省吾 坂田 省吾
三浦 友史 渡邊 一雄
三上 利典 筒井 和義
宮本 忠 生和 秀敏
八代 京子 坂田 省吾
山田 由紀 宗岡洋二郎
興倉 恵 林 光緒
吉田 元 岩永 誠
児玉 俊興 磨井 祥夫
宮脇 亜弥 安藤 正昭
長嶋 信行 小村 堯

アフリカツメガエル AMBP 遺伝子の発現と肝細胞の分化
大学生の自己概念の構造 - 一独立的-相互依存的自己解釈図式尺度による検討-
入眠期における事象関連電位のトポグラフィ分析
ネットワークモニタリングと適応との関連の分析
集団成員の性別構成と世代が性別カテゴリー顕現性に及ぼす効果
リーダーシップ発生機序に関する研究 - 模擬世界ゲームによる検討-
鳥類の脳に存在する新規 FMRF amide 関連ペプチドの単離・同定と脳内局在
ワークストレスに及ぼす責任性の効果に関する研究
音楽が記憶課題に及ぼす妨害作用
副腎皮質刺激ホルモンの StAR 蛋白質発現量に対する影響
状況要因と自己査定・高揚動機が他者への焦点づけに及ぼす影響
記憶に及ぼす音楽の影響
視覚及び言語フィードバックが運動学習に及ぼす影響
KRのある推測反応系列の文脈依存性の研究
気分維持に及ぼす選択的注意の効果に関する研究
ナガサキアゲハ (Papilio memnon) の翅脈に依存した斑紋の形成機構
一致性への志向性の強さが他者への反応に及ぼす影響
アルコール投与時におけるラットの時間弁別行動
ナガサキアゲハ成虫の翅面斑紋の比較形態学
鳥類の脊髄に存在する新規 FMRF amide 関連ペプチドの単離・同定
認知的対処方略の採用及び効果に関する個人・状況要因に関する実験的研究
線形課題を用いた連合形成理論の検討
脊椎動物の生理活性ペプチドの探索
大脳半球機能差とウルトラディアンリズム
音楽の低周波成分が情動に及ぼす影響
ドライバーの運動適性に関する研究
ウナギ腎臓・食道・鯉からの浸透圧調節因子の抽出
健康・運動・体力に関する意識調査による学年別・性別における学生の健康・運動・体力観の比較検討



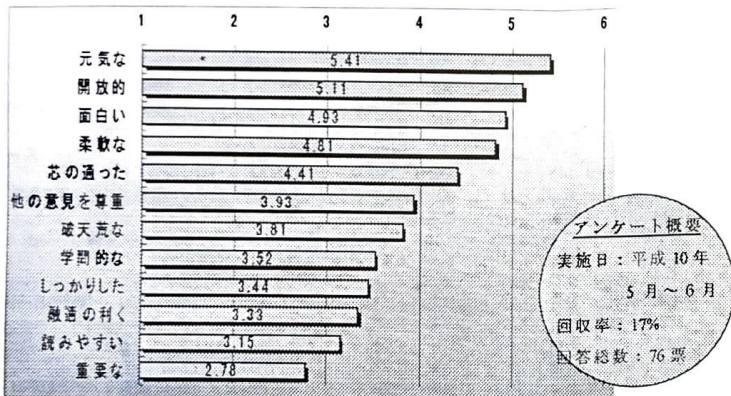
飛翔アンケート調査の結果について

◇過日、飛翔に対する読者の評価・印象を調査するため、アンケート調査を行いました。残念ながらお世辞にも良いとはいえない回収率に終わってしまいましたが、それでも回答の中には多

くのご批判、ご提案が寄せられており、大変参考になりました。この場を借りて厚くお礼を申し上げますと共に、その内容を紙面にてご紹介したいと思います。

「飛翔のイメージ」▶

：12の形容詞について、飛翔にどの程度当てはまるかを、7段階で評価してもらいました。数値が大きいほど肯定的な回答が多かった事を示します。



なお、上記の表は教官・事務官による回答のみを集計した表です。学生の回答はばらけており、一貫した傾向は見られませんでした。

教官の評価と学生の評価

予想されたとおり、学生による飛翔評価と教官によるその間には大きな開きがありました。回収率の低さから、あくまでも飛翔に好意的な方の回答集と見るべきでしょうが、総じて教官は「学内情報の仕入れ先」として、学生は「読み物」としての飛翔を評価する向きが強いです。

内容について

内容については、賛否様々な意見を頂きました。教官・事務官の回答には学生の意見が表れている事を評価する内容が多数見られました。一方で、記事内容の底の浅さや勇み足、事実関係についての疑問を指摘する回答も多く、より突っ込んだ議論が求められている事が感じられました。

学生の回答には、「企画の対象が本当に学部生の興味に即したものであるか」についての疑問が目立ちました（例えば、1,2年生向け過ぎではないか等）。

また、レイアウトのお粗末さについてのご批判も頂きました。

その他 様々な企画案や御提言を頂きました。

読者からの声

西村 雄郎 (社会科学コース 助教授)

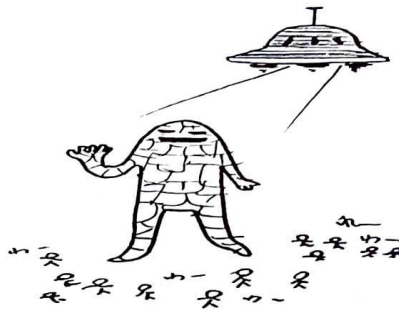
僕は高校時代「学校新聞」を3年間作っていた。同級生にあまり読まれないだろうことを覚悟し、自らの新聞を「飛行機新聞」（「読まれずすぐ折り畳まれて投げられる新聞」という意味）と脚揃しながら、自分に忠実に新聞を作った。その結果は、代々高校新聞コンクールの賞を取り続けてきた新聞が初めて何の賞も取れないという「栄光」だった。「飛翔」の感想を求められて自分の高校時代を思い出した。アンケートをとり感想を聞くなど編集委員は内容があり、読まれる広報誌を作るのに高校時代の僕のように苦しんでのだろうなと思った。そして、その苦しみはあまり報われないだろうとも思った。総合科学部報「飛翔」とは何なのだろう。例えば学部内の「情報誌」なのか、学部情報を外部に伝えるための「広報誌」なのか、折衷的なものなのか。そして、何が内部に、外部に伝えられるべき情報なのか。

日常の問題を問題とすることも必要かも知れない。しかし、日常の問題のみを追うだけでいいのか。他人の評価を聞く必要はあるのかも知れない。しかし、他人の意見に左右されるだけでいいのか。

考えるべきことは多いと思う。自分たちで考えて、決めたなら自由にやればいいと思う。あまり報われないことを覚悟しながら。

重松 秀尚 (文学部2年)

新聞ではよく「社説」は玄関に、「コラム」は縁側に例えられる。とつきやすいもののたえに用いられる表現だが、飛翔はいうならばその両方の雰囲気兼ね備えたものだと思う。格調高い縁側、たとえばよいのだろうか、はたまた外に開かれた玄関と形容す



ればよいのだろうか。いずれにしてもそこには自由で気のおおけぬ雰囲気が漂っている。

先号の「教育特集」を読んでみる。固い内容ではあるが、大学生の視点で分かりやすく、討論形式も交えていて好感が持てた。大学に入って勉強することの価値について日々疑問を持っていた僕だったが、これを読んで多少スッキリした。私事ではあるが妹が今年大学受験なので大学についてもっと考えさせてやろうと、飛翔の先号を家へ送った。最近電話で大学のシステムについてよく聞いてくるのは大学について多少意識し始めた傾向であろう。

先号では広島大学を「教育特集」というマクロな視点と「K棟大図解」というミクロな視点で論じていて、大変面白く読ませていただいた。内容の豊富さ、視点の多様性を生かしつつ、これからの飛翔にますます期待したいと思う。

ありがとうございました。他学部の方からの感想は新鮮でとても嬉しかったです。また、「飛行機新聞」というネーミングには驚きました。「飛翔」という題名の由来が気になってきました……

飛翔人気記事ベスト3

<教官・事務官>

- 1位 研究室紹介
- 2位 新任教官紹介
- 3位 よりよい授業を目指して

<学生>

- 1位 グラビア
 - 2位 研究室紹介
 - 3位 特集記事
- 総合1位は「研究室紹介」

▽編集委員が毎年替わるのが飛翔の魅力の一つ、とする回答もありました。前年までの反省はしっかりと引き継いで、よりよい飛翔を作っていきたいと思います。

ご協力ありがとうございました。

平成9年度編集委員

§ 編集後記 §



秋葉 節夫 (編集委員長 社会科学コース 教授)

今回の55号は、学生編集委員のメンバーの奮闘で無事刊行の運びとなりました。私も、従来は、一読者だったのですが、今回は教官の編集委員長として、企画・運営に初めて加わりました。そして、外から見ては解らない「飛翔」の作成過程の大変さも体験しました。このような努力を払っているのですから、あらためて、学生編集委員のメンバーの労をねぎらいたいと思います。と同時に、「飛翔」は、いうまでもなく、学生、教官、事務官の三者で作るものですが、現状では、こうして、学生編集委員の努力によって支えられています。ですから、今後、教官、事務官がどのような役割をもって参加していくかが問われているように思います。

松田 理恵子 (外国語コース 2年 学生編集長)

53号から飛翔に携わり、編集作業がどんなに大変かを目の当たりにしていただけに、編集長に推された時はどうなることかと自分の身を案じました。ところがどっこい私の身は思ったより丈夫で案じるべきは飛翔の発行にありました。幸い、頼れるOBと優秀な編集委員に恵まれたので、良いものが発行できそうです。編集委員の、忠実に仕事をこなす姿は見ていてとても嬉しかったです。最後になりましたが、作業の不手際でご迷惑をかけた教官、事務官の皆様にもこの場を借りてお詫び申し上げます。

飯寺 純子 (地域文化コース 2年)

記事がまとめられるまでにはいろいろ闇に葬られる事実があるものですねえ……まあ、何はともあれ編集長お疲れサマでした。役に立たない副編集長でゴメンナサイ☆☆☆…関係ないけど最近かなり疲れてしまっている。愛するザバの音楽でも聴いて安らかに眠りたい…。

青松 伴晃 (人間文化コース 2年)

人手が足りないかと思ったら、10生がわんさか飛翔に入ってきてその内約を開いてみると、立候補が大多数を占めている。しかしいざ人手が多くなると逆に面倒な部分も多く、結果的に今号も締め切りに追われる日々になってしまった。しかし俺が担当した特集は俺のカラーが自由に出て面白かった。最後に満足のいくものができて良かったと思う。

伊藤 美知子 (社会科学コース 2年)

私はいじめについての特集の編集に参加しました。いじめとは何か、その原因、対処法など編集員みんなで思い悩んで、いじめ問題の難しさを実感しました。私にとつていじめは、昔よりも遠い存在になっていました。でも、編集に参加して、いじめの問題を身近なものとしてじっくり考えることができ、良い経験になったと思っています。

井上 まゆみ (外国語コース 2年)

がんばりました！

永山 啓一 (自然環境研究コース 2年)

編集後記？編集後記を書くほど僕は頑張ったのかな？いや、頑張った実感がない方がよいのかな？余り頑張った事を強調すると何か嫌々やってくるように聞こえます。僕は頑張ることが大嫌いなのです。

前田 和寛 (生体行動科学コース 2年)

その一本 吸えば肺ガン 吸わなきゃhigh 人

森岡 ナナ&石川 友実子

(社会科学コース 2年)

私たちは頑張った。

有田 夏子 (1年)

K一郎君といつも意見が分かれて大変でした。次からはお互い譲り合いの精神を大事にしていきましょう。パソコンや編集など最後あたり、お手伝いできなくてすみませんでした。

大仲 慎二 (1年)

そもそも僕が編集委員になったのは、うちのチューターグループから1人もやりたいひとがいなかったんで、じゃんけんできめようということになって、そしたらなぜか20人以上もいたのになった3回ぐーを出しただけで決まってしまうて…。



壁谷 彩代 (1年)

グラビアをやりました。とりあえずやったとは思ってます。そういうことで…。

竹田 慶 (1年)

☆☆=！◆が■！……………笑い疲れた。

近澤 庸平 (1年)

入学手続きの時もらった分厚い封筒の中に入っていたのが「飛翔」でした。学生が中心となって編集していることやその深い内容に、大学生は違うな、と読んでいて驚いたのに、編集に携わるとは思っていませんでした。実際やってみて、紙面に表れない多くの人の努力と時間を費やしていることが分かったうえ、教官や先輩達との交流などでも多くのことを得られました。自分が関わった部分はごくわずかでしたが、締め切りに迫られながらみんなをまとめ上げた編集長、本当にお疲れさま。それから、淳也さん、でらさん、佑美さん、ねぼんにはお世話になりました。

藤波 嘉信 (1年)

雲がどよよ。風がそよそよ。雨がしとしと。そんな雨の日が僕は好き。明日も雨になあれ。

古谷 嘉一郎 (1年)

眠い朝も、眠い夜も、さらにはテストの前日もいつまで編集作業をするのかな？まあいいや。まあ編集長おつかれさまでした。今回は、新編集長(カズ君)が中心となってさらにナイス(死語)な飛翔を提供させていただきます。じゃ、皆さん56号で会いましょう。

吉田 昭子 (1年)

5行ぐらいの文章の打ち込みにめちゃくちゃ時間がかかったりしたけど、ちょっとだけパソコンが使えるようになって満足です。

松永 孝治 (自然環境研究コース 3年)

お疲れさまでした。
以上
追伸：松子へ：これは載せなくても良いです。
以上

編集集中

まだだ、まだ終わらんよ！
田村 久 7月30日午後11時
(外国語コース 2年)



***** 編集委員 *****

- * 教官：秋葉 節夫 (編集長, 社会科学コース 教授)
- * 中山 裕道 (数理情報科学コース 助教授)
- * 井口 容子 (外国語コース 助教授)
- * 事務：玉田 寛 (学生係)
- * 学生：2年
- * 松田理恵子 (外国語コース)
- * 飯寺 純子 (地域文化コース)
- * 青松 伴晃 (人間文化コース)
- * 石川友実子 (社会科学コース)
- * 伊藤美知子 (社会科学コース)
- * 井上真由美 (外国語コース)
- * 柴田 俊平 (物質生命科学コース)
- * 杉野 茜 (外国語コース)
- * 田村 久 (外国語コース)
- * 永山 啓一 (自然環境研究コース)
- * 古川 恵里 (数理情報科学コース)
- * 古川由香里 (地域文化コース)
- * 前田 和寛 (生体行動科学コース)
- * 森岡 ナナ (社会科学コース)
- * 1年
- * 有田 夏子
- * 大仲 慎二
- * 壁谷 彩代
- * 小橋 憲
- * 竹田 慶
- * 田中 真弓
- * 近澤 庸平
- * 藤波 嘉信
- * 古谷嘉一郎
- * 三浦和歌子
- * 吉田 昭子
- * 助っ人
- * 石橋 淳也 (生体行動科学コース 3年)
- * 松永 孝治 (自然環境研究コース 3年)
- * 川合 通恵 (人間文化コース 2年)
- * 原田 晶子 (物質生命科学コース 2年)

飛翔伝言板

～そのころ Ver.2～

●お詫びと訂正

飛翔54号の記事について、P44の「編集委員一覧」において石倉先生の所属が「社会文化コース」となっていたが「社会科学コース」の誤りでした。また、研究室紹介の西井先生のお名前のルビが「リュウエイ」先生の誤りでした。これは学生編集委員の編集上のミスであり、関係各位様には大変ご迷惑をおかけする結果となりました。お詫びして訂正します。

以後、このようなミスがないよう、十分校正には気を付けますのでご容赦下さい。また、万一このようなミスを発見した方は飛翔までご一報下さい。

●卒業生へのお知らせ

広島大学総合科学部学部報「飛翔」を卒業生の方にはお配りしていますが、卒業2年目以降の方に対しては、希望者のみに送付する事しております。引き続き「飛翔」の郵送を希望される方は、1998年12月末日までに下記の住所宛にハガキでご連絡下さい。

〒739-8521

東広島市鏡山1-7-1

広島大学総合科学部飛翔編集委員会

編集委員

専属記者・専属カメラマン募集中



感想・批評・お便りを待っています。
hisyo@ipc.hiroshima-u.ac.jp

以下次号……

